世田谷村日記

石山修武

四月五日六日

伊豆半島西海岸松崎町、日本フィンランドデザイン協会主催の景観シンポジューム。大沢温泉ホテル泊、町役場のいたれり、つくせりのもてなしで皆さんには楽しんでいただけたと思う。特に町役場がすすめている花畑を小一時間歩いてもらったのが良かった。人工物と共に森や草花の大事さがわたしたちも良く理解できた。「花畑を歩かせてもらいたい。」とフィンランド側から発言があった時は少々驚いたけれど。一週間全部おつき合いしたかったが、佐賀のワークショップが終わったばかりで仕事が山積しており不可能だった。

四月八日（日）

午後早稲田リーガロイヤルホテルで初めての石山研同窓会。七五名程のＯＢが集まった。初期メンバーに会えて懐しかった。何とか皆やっているようで心強い。母船を強くしておかねば、ＯＢ会は成立しないから、責任もある。

四月九日（月）

毎週月曜日の世田谷ミーティングも、ようやくにして定着した。川崎市の「星の子愛児園」の実施設計に追われ始めているが、若いスタッフだけで何とか乗り切ってみようと決心した。院生はほとんど使いモノにならぬが、その原因は私自身の教育方法にもあるのはハッキリしているのだから、事態は複雑だ。

四月十日

仙台にて本間俊太郎元宮城県知事と会食。汚職容疑で収監されて以来のことである。「超獄」という句集を出版され、いただいた。獄舎の体験は私にはないが、本間さんも痛烈な体験をされた。出獄後のインドでの句も良かった。

偉そうなことは言えぬが、人間の附合いはドン底の時のモノが最も信用できる。失意の人、逆況の人こそ大事にしなくてはならない。唐桑町長選でDr佐藤が当選。八八年から続けた臨海劇場運動のリーダーである。あの劇場は私のキャリアの中でもことさらな異彩を放つが、昔の仲間が社会の表舞台に浮上してくるのは頼もしい。

四月十四日　土

外房一宮海岸でスタジオ・ヴォイスの取材。厳しいスケジュールの中で一日時間をとったが、こういう時間は大事なのだ。人間、遊ばなくなったら終りです。サーファーの手作りの家で、二人の息子の手作りの室が面白かった。自分の部屋を自分の好みで作りあげるとそれは芸術になってゆく。「室内」の連載と共に、わたしには良い刺激になっている。

四月十七日

二度目の学部レクチャー。前期は院のレクチャーも重なり、厳しい。仕事も忙しくなり時に逃げ出したくなるが、忙しければ忙しい程、レクチャーには力を入れなくてはならぬ。それでなければ「先生」やってる意味がない。

四月二〇日

午後、院生のエスキス、チェック。世田谷組の学生とは力の落差が出てしまうのは仕方のない事だ。